

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 1 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520430

研究課題名（和文） ドイツ語動詞の語句結合の使用実態

研究課題名（英文） A usage-based study of the combinations of German verbs with sentence constitutions

研究代表者

在間 進 (ZAIMA SUSUMU)

東京外国語大学・名誉教授

研究者番号：30117709

研究成果の概要（和文）：

研究目的は、1)大規模コーパスを活用し、2)動詞の語句結合を使用実態の観点から分析し、そして3)それらの分析結果に基づき、従来の結合価研究に代わる新たな、言語使用分析の方法論を確立することである。第1点については、事例などの収集検索をプログラムの処理にできるようになり、第2点については、主要語彙の具体的使用実態分析を通して、分析モデルを提示し、第3点に関しては、使用頻度を軸にした、有用性を目標とするドイツ語研究の方法論を確立した。

研究成果の概要（英文）：

The investigative purposes of our project are to analyze the combinations of German verbs with the sentence constitutions based on their usage and to establish a new computer-supported method for the analysis of German verbs. We developed a computer program to manipulate the data, next we will present an analysis model of German Verbs, and finally establish the frequency-based and availability-oriented method.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：ドイツ語 言語学

1. 研究開始当初の背景

ドイツ語動詞の語句結合は、ドイツ語研究の極めて重要な研究テーマであり、従来から

も幅広く「動詞の格・前置詞支配」、「結合価」という名のもとで研究されて来た。

しかし、まず、「実証的記述」という点で

は、以下の2点で不十分であった。

(1) 使用実態の分析

従来、動詞の語句結合が「実際」どのように使用されているのかという視点が不十分であった。

たとえば「任意的必須成分」の「任意性」には、必須性の度合い（「ほとんど必須」、「ある程度必須」など）、すなわち使用頻度に差がある。また「必須成分」と言われるものでも、特定の条件下で削除可能になる。たとえば、zu 不定詞句では、必須成分の削除可能性が拡大するという傾向が見られる。

このような「任意性」「削除可能性」という現象は、ドイツ語を記述的に研究するという立場に立つならば（そして特にドイツ語の使用実態を明らかにするという立場に立つならば）、サンプル例に基づき、単にその現象を指摘するだけで済ますことはできず、「任意性」に関してはその度合いを、「削除可能性」に関してはその条件の広範囲な実証的記述が必要である。

(2) 結合語句の個別的かつ幅広い分析

動詞の「多義性」と結合語句（「構文」）の意味的特性は、極めて密接な関係にある。基本的に、動詞の意味が異なれば、結合語句（「構文」）も異なるのであり、結合語句（「構文」）が異なれば、動詞の「語義」（より詳しく言うならば、その文の動詞的意味）も変化を受ける。

従来、この種の、動詞と結合語句の意味的関連（あるいは相互作用）は、サンプル的事例を軸に、理論モデル的に記述されるのみで、これらの具体的な意味的対応関係を—IT 技術の向上によって十全なデータが収集・分析可能になったのにも拘わらず—個別的かつ幅広く分析されることはなかった。たしかにここ数年、この種の研究が行なわれ出しているが、決して十分と言えるものではない。

そして、上記2点よりもはるかに重要なことは、この種の研究分野における理論的「閉塞性」である。一言で言えば、動詞の語句結合の分析は、動詞と語句の間の「必須性」「非必須性」という概念を軸に展開されてきた。

しかし、「必須性」「非必須性」という概念は、名詞などのような、言語の「外」に実態を持つ概念ではなく、言語使用という具体的発話行為に「随伴」する、言語の「内」の副次的概念なのである。このような「非実態的・言語内的」な概念がその研究の基盤になっている限り、動詞の語句結合に関する新たな、そして厳密な意味での「研究」という名にふさわしものに展開しうる可能性はない。上記の2つの問題点も、この学問的「閉塞性」

に起因すると言える。

以上のように、動詞の語句結合に関する研究は、新たな方法論の開発とそれに基づく新たな実証的分析が待たれる状況にあった。

なお、大量のデータ処理に必要な検索ソフトなどに関して言えば、それらは、主に技術的な観点から開発されたもので、必ずしも言語研究者の個別的問題意識に即して開発されたものではない。したがって、研究テーマの進展、問題提起の展開に応じて、その都度新たな技術の開発が必要とされる状況でもあった。

2. 研究の目的

本プロジェクトの研究目的は、「1. 研究開始当初の背景」の状況認識に基づき、従来の「結合価」研究を継承しながらも、

(1) 言語使用実態を分析するのに適した検索ソフトなどの改良・開発を行う

(2) その検索ソフトなどを活用して、ドイツ語動詞の語句結合の使用実態を分析する

(3) その分析を通して、従来の結合価研究に代わる新たな、言語使用実態に根差したドイツ語動詞語句結合分析の方法論を確立することである。

3. 研究の方法

「2. 研究の目的」で述べたように、本プロジェクトは、主に三つの側面（検索ソフトなどの活用、使用実態の分析、方法論の確立）から成る。

(1) 検索ソフトなどの活用

本プロジェクトにとって、大規模コーパスからの大量データを処理することが基本的作業になるため、検索ソフトなどの IT 技術を活用する。

なお、コーパス、検索ソフトなどに関する最新情報を収集し、検討するのは当然であるが、特に検索ソフトの場合、「初歩的な」言語分析に活用できても、個別の細かな研究テーマに対応しうるようなものは（ほとんど）なかった。したがって、本プロジェクトの進展に伴い生じて来る新たなニーズに対応しうる改良を行った。また、大規模コーパスやコーパスに基づいた分析結果などとしては、主に Institut für deutsche Sprache (<http://www.ids-mannheim.de/>) の DeReKo および elexiko, Berlin-Brandenburgische Akademie für Wissenschaften (<http://www.dwds.de/>) の DWDS, Duden online (<http://www.duden.de/>) などを利用した。

(2) 使用実態分析

分析モデルの確立を目標に、検索ソフトな

どを最大限に活用し、ドイツ語動詞の語句結合の使用実態を分析する。

基本的な分析手順は、以下のようになる。

・分析対象の動詞の事例を（添加成分も含めた形で）収集する。

・結合語句を、意味的カテゴリーに分類し、語句結合タイプを確定する。

・それぞれの語句結合タイプおよび構成素の使用実態、そして多義的な語彙に関しては、語句結合の意味的カテゴリーと多義化の対応関係も調査する。

なお、具体的な事例分析を通して得られる知見がある場合、それらを取り入れながら、分析方法を精緻化する。

(3) 方法論の確立

「1. 研究開始当初の背景」で述べたように、ドイツ語動詞の語句結合の使用実態を真の意味で明らかにするためには、新たな研究構想とそれを可能にする方法論の開発が不可欠である。そのためには、言語研究の「科学性」、当然のように語られる「真理」、「事実」、「証明」などの諸概念を再検討し、本プロジェクトの実証研究を積み重ねる中で、使用実態に根差したドイツ語研究がどうあるべきかを考察する。

4. 研究成果（主な成果）

(1) 検索ソフトなどの活用

検索ソフトなどの活用に関しては、ドイツ語では副文および **zu** 不定詞句の場合、動詞の位置が末尾に置かれるという特色に注目し、分離動詞のような事例も含め、事例の収集、検索、頻度調査などの分析が可能になる方法論を確立した。なお、語彙リストの有用性を評価する方法として、差分調査を実施し、一定の成果を収めた。

(2) 使用実態分析

動詞の語句結合に関する実証的研究に関しては、サンプル的分析を行った上で、語義の種類（「行為」、「状態変化」、「移動」など）、「多義化タイプ」、各種のドイツ語語彙使用頻度リストなどの観点から分析対象になりうる動詞を選定した上で試行的な調査・分析を行い、分析データを蓄積するとともに、大規模コーパスからの大量データに基づく分析、すなわち実際の言語使用に基づく分析の新たな一モデルを提示した。

なお、行為動詞（たとえば **arbeiten**）、方向性を伴う行為動詞（たとえば **klopfen**）、変化動詞（たとえば **ändern**）、その他（たとえば **verbringen**）などを分析した結果からは、以下のような具体的知見を得た。

①結合語句の情報構造的な特性（たとえば情報

の新旧）などの観点が重要な役割を果たす。

②「必須成分」には当該動詞に「従属的な」ものと動詞と幅広く結合可能な「自立的な」語句の2種類を想定するのが妥当である。

なお、「多義」とされる動詞の場合の、個々の語義（Bedeutungsvarianten）と統語的意味的結合語句の相関性に関しても、その理論的な問題点を明らかにすることができた。

③動詞の「多義性」と結合語句（「構文」）の意味的関連について言えば、**schütteln**「揺する（行為）」⇔「揺すって落とす（行為+移動）」のような、文の意味構造に基づくものは、相対的に少数で、したがって、むしろ **anbieten**「差し出す（物の移動）」⇔「申し出る（発話行為）」のような、結合語句の意味的カテゴリーに基づく多義化の分析の方が有用性が高いとの暫定的結論に達した。

④結合の可能性のみを見る限りでは見えて来ない言語使用上の特性が、使用頻度の観点から見えるようになることがある。

(3) 方法論の確立

①ドイツ語研究が「研究」という名にふさわしいものになるためには、事例解釈の内省的説得性を追求する方法論からの脱却が必要であり、設定した目的に基づく客観的検証可能な研究へと展開させるべきであるとの結論に達し、具体的にはドイツ語の理論的研究の、ドイツ語学習への実践的応用という具体案を提示した。この研究の枠組みを図示すると、以下ようになる：

「事例分析—仮説の提示—（ドイツ語学習への）有用性に基づく仮説の実証」

②使用頻度の内的構造

「形」と「意味」の関係を精査することによって、使用実態を適切に把握するためには、使用頻度調査が不可欠であるとの結論を得た。

使用頻度には、「話者（視点、捉え方など）」「文形成の規則体系」「実際上の使用（言語経済性、認知能力的制限など）」の三つの要因が深く関わっている。すなわち「話者」の、たとえば物事の捉え方には複数の可能性があり、また、同一の事象に関して、複数の文形成規則による表現が可能であり、そして、言語使用には、さらに様々な言語経済的要因（主観的な「好み」も含む）が関わって来るのである。そして、これらの複合的結果が使用頻度として数値化されるのである。この論考をさらに一歩進め、「言語使用の頻度は、ドイツ語の使用実態の根底に存在すると想定されるドイツ語文形成規則体系」を反映するとの仮説を提示した。

以上の研究成果を一言で簡単にまとめる

ならば、動詞の語句結合の分析を、「必須性」「非必須性」という「非実態的・言語内的」な概念から解放し、使用実態に基づく、IT技術による使用頻度調査などを軸にした、有用性を目標とするドイツ語研究の一モデルを提示したということになる。この方法論は、動詞の語句結合を使用実態に即して「立体的に」分析しようとするもので、今後の動詞の語句結合の一般的な分析基盤になると確信している。

なお、今後の展望的課題について一言述べると、この種の研究成果をどう実際の語学教育に関連付けていくかである。ドイツ語の使用実態の分析と効果的なドイツ語教育の実現は、一たとえ両者が密接な関係にあるとしても、決して一直線で結びつくものではないからである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

- ①在間進, ドイツ語研究に関する三つの考察—容認性, 規則化, 使用頻度—, DER KEIM (東京外国語大学大学院ドイツ語学文学研究会), 査読無, 35巻, 2012, 1-11
- ②在間進/カン・ミンギョン, コーパスに基づくドイツ語文形成規則の分析, *Energeia* (ドイツ文法理論研究会), 査読有, 36巻, 2011, 59-73
- ③Susumu ZAIMA/Haruhiko IMAMICHI/Itsuko TOKITA/Minkyong KANG, Korpusbasierte Analyse der syntakto-semantischen Konstituentenverbindungen des Verbs *verbringen*, Mapping zwischen Syntax, Prosodie und Informationsstruktur, 査読有, 2011, 103-120
- ④成田節, データ:モダリティー・ドイツ語, 東京外国語大学語学研究所論集, 査読有, 第16号, 2011, 75-86
- ⑤成田節, ドイツ語にみる文の成分, 国文学解釈と鑑賞, 依頼原稿, 7月号, 2010, 141-147
- ⑥在間進, 大規模コーパスを用いたドイツ語研究, 査読有, 日本独文学会研究叢書061, 2009, 2-10
- ⑦成田節, 視点と日独語の表現—翻訳の対照を手がかりに, 東京外国語大学論集, 査読有, 第79号, 2009, 399-414

[学会発表] (計9件)

- ①在間進, ドイツ語初級文法学習という視点からの「基本語彙」, 2011年度日本独文学会秋季研究発表会, 2011年10月16日, 金沢

- ②成田節, 翻訳と語り手の視点, 2011年度日本独文学会秋季研究発表会, 2011年10月15日, 金沢
- ③Susumu ZAIMA/Kazuya ABE, Zur Frequenzanalyse im deutschen Sprachgebrauch, 第38回語学ゼミナール, 2011年8月29日, 京都
- ④Takashi NARITA, Zu satzsemantischen Funktionen der verbalen Morphologie im Deutschen und im Japanischen, XII. Kongress der Internationalen Vereinigung für Germanistik (IVG), 2010年8月4日, ワルシャワ大学 (ポーランド)
- ⑤成田節, ドイツ語と日本語の受動文, 『外国語と日本語との対照言語学的研究』第二回研究会, 2010年7月3日, 東京外国語大学国際日本研究センター (東京)
- ⑥Takashi NARITA, Zu unterschiedlichen Ausdrucksweisen im Deutschen und Japanischen — anhand von Belegen aus literarischen Texten und deren Übersetzungen —, Internationales Symposium: Literaturwissenschaft und Fremdkulturhermeneutik, 2010年6月4日, 淡江大学 (台湾)
- ⑦在間進/カン・ミンギョン, コーパスに基づくドイツ語文形成規則の分析, 2010年度日本独文学会春季研究発表会, 2010年5月29日, 神奈川
- ⑧Susumu ZAIMA/Haruhiko IMAMICHI/Itsuko TOKITA/Minkyong KANG, Häufigkeitsanalyse der linearen Kombinationen der syntakto-semantischen Konstituenten mit dem Verb *verbringen*, 第37回語学ゼミナール, 2009年8月27日, 京都
- ⑨Takashi NARITA, Zum Begriff "Perspektive" — eine deutsch-japanisch kontrastive Untersuchung, 第37回語学ゼミナール, 2009年8月27日, 京都

6. 研究組織

- (1)研究代表者
在間進 (ZAIMA SUSUMU)
東京外国語大学・名誉教授
研究者番号: 30117709
- (2)研究分担者
成田節 (NARITA TAKASHI)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号: 50180542
- (3)研究分担者
林俊成 (LIN CHUNCHEN)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号: 70287994